

シーシュポスの苦役： スタンレー・ホフマンのリベラリズム論

黒田俊郎

Le bonheur et l'absurde sont deux fils de la même terre.

Albert Camus

1. はじめに

この文章の目的は、スタンレー・ホフマンの初期の論考を素材としながら、ホフマンのリベラリズム論の特色を内在的に再確認し、そのことを通して、国際関係理論におけるリベラリズムの意義と可能性について考察するための予備作業をおこなうことである。ホフマンが自らの立場を「リベラル」と明言するようになったのは1980年前後のことである。1978年刊行の米外交論『優越か世界秩序か』には世界秩序論への関心が顕著であるし¹⁾、1981年刊行の『国境を超える義務』は、ホフマンのリベラリズム論を考える際には必要不可欠な国際倫理をめぐる先駆的な業績である²⁾。また1984年11月にコロンビア大学で行われた講演を基にして執筆された論考「リベラリズムと国際問題」³⁾は、今日では、国際関係論の教科書にリベラリズムの代表的な論考として言及されている⁴⁾。このようにホフマンをリベラリストとして論じる場合は、1980年前後の著作を当時の時代状況のなかで検討することが中心となるべきであるが、本稿では、その前提として、ホフマン初期の論考のなかにそのリベラルな問題関心の芽がどのようなかたちで存在しているのかを確認したいと思う。たとえば初期の代

表的論文のひとつ「ルソーの戦争と平和論」のなかに見られる次のような問題設定の仕方を基礎づけているのが国際関係における倫理と平和秩序への強い関心、すなわちリベラリズム的な問題関心であることには疑問の余地がない。

私たちは、国際社会における平和の条件に（おそらく最大の）関心を抱いている。というのは、市民にとって、秩序、自由、道徳性の源泉として称揚されてきた国家制度それ自体が、他方では、国際的なカオスの元凶でもあり、物理的危険と道義的苦悩を引き起こすからである。国家と世界、その双方にとって良き市民であるためには、どうしたらよいのだろうか。国際競争の圧力のもとで、国家が市民を抑圧したり、外部の人に対して道義に反する行為を市民に強いるのをどうやったら防ぐことができるのか。そしてさらに、そのような市民擁護の方策は、個々の市民を同胞に結びつけている忠誠の絆とアイデンティティの感覚を破壊することなしに実施されねばならないのである⁵⁾。

以下、本稿では、紙幅の都合もあり、かつて筆者がその内容を詳細に検討したことがある初期論考二編、「ミネルヴァとヤヌス」と「響きと怒り—歴史のなかで戦争に対峙する社会学者—」に考察を限定し、初期ホフマンにおけるリベラリズムの位相について検討する⁶⁾。

2. 「ミネルヴァとヤヌス」におけるリベラリズムの位相

「ミネルヴァとヤヌス」は、レイモン・アロンの『諸国民間の平和と戦争』⁷⁾をめぐる詳細な書評論文であるが、その執筆意図は、アロンの著書の内在的検討を通して、第一に国際関係上の出来事がなぜいつもリベラルな価値と理念を裏切り、その制度構想を打ち破るのかを考察すること⁸⁾、

そして第二に、そうであるにもかかわらず、国際関係の現実のなかで「リベラル」として生きていくためにはどのような倫理と実践が必要なのかを模索することであった。

アロンは、『諸国民間の平和と戦争』を四部に分け、第1部「理論」では、国家間関係の概念的分析のための基本概念の構築を、第2部「社会学」と第3部「歴史」では、それぞれ、基本概念に具体性を与える社会学的・歴史学的事実（歴史叙述は主に第2次大戦後から60年代初頭まで）を検討し、最後に第4部「実践学」では、第3部までの議論を踏まえたうえで規範論を展開し、国際関係における道義、戦略、平和を探求している。

ホフマンによれば、アロンが提示する国際関係理論の特徴は、中央政府の不在、すなわち暴力の偏在性、利害の多元性、価値の相対性の下、自律的決定主体が複数存在し、かつそのそれぞれが武力行使の正統性と合法性を有する結果生じる恒常的な「戦争の危険（le risque de guerre）」が、国家の外交・戦略行動にどのような影響を及ぼすかを分析することにある。したがって国際関係の理論は、なによりもまず、国際政治を国内政治から峻別しなければならない。かりに権力政治を「複数の意思がぶつかりあい、指揮命令系統をめぐる対立が激越化する政治」（MJ, 26）と定義するならば、そのような意味での権力政治を国内社会に見出すことは稀である。国内社会においては、暴力装置と官僚機構を独占した中央政府の存在により権力政治のいわば「脱権力化」が進行し、政治的意思の衝突は局限化・法制化され、指揮命令系統は制度的に一元化される。武力行使は、通常、政治過程からは排除されている。他方、国内政治とは対蹠的に、国際関係では、文字通り、権力政治が全面的かつ無制約である。そこでは諸国家が「自らの手で自らの正義を築く権利を要求し、その正義のために闘うか否かを決めるのもまた唯一自らにのみ許された権利であることを主張する」⁹⁾がゆえに、一見技術的で合意調達が可能にみえる経済社会分野においてさえ、利害関係を有する諸国家の意思だけでは問題は容易に政治闘争化するからである。個別利害への配慮が優先され、合意よりも対立が色

濃い、武装した諸国家が併存する国際関係の世界では、究極の強制力たる戦争の可能性が政治手段として諸国家につねに意識されているのである。

それでは、国内政治と峻別される国際政治を理解するために、国家の外交・戦略行動を経済行動との類似で把握することはできないだろうか。両者には、一見、共通点が存在するようにみえるからである。すなわち経済では「欠乏」が主要問題であり、それを克服するための数多くの選択肢があるのに対し、国際関係では「戦争の危険」が主たる問題であり、そのなかでの生き残りを模索する多様な手段がある。ひとつの中心的課題と、それに対処する複数の選択肢、という問題の構図は、ここでは共通しているようにみえる。しかしホフマンによれば、アロンの解答は否定的である（MJ, 28-29）。たしかに国家の外交・戦略行動と経済行動には上記のような共通項が存在する。しかしこの共通性はこれ以上は進まない。なぜならば国家の外交・戦略行動と経済行動では、社会的行為の類型が異なるからである。「経済行為は手段的であり、経済学は手段をめぐる科学であるのに対し、外交政策行動は、道具的であると同時に価値志向的であり、ゆえに国際関係の研究は、手段と同時に目的をめぐる科学でもある。」（MJ, 28）さらに経済活動における貨幣の存在が「手段の価値を測定する厳格な道具となり、かつ諸個人の選好からなる混沌を相対的に正確な一つの目的、すなわち貨幣的充足の最大化に置き換えることを可能とすること」（MJ, 28）によって、経済学は、目的を手段の下に包摂することができるようになり、経済学者は、諸個人が獲得した貨幣をどのような目的で行使するかまで考える必要はない。「経済理論が相対的に明確な目的と（経済的諸変数の相互依存ゆえの）厳格な規則を有した競争的行動の理論であるため、経済学は、経済的行為主体の合理的行動を定義することが可能となるのである。」（MJ, 28）

他方、国家の外交・戦略行動は、これとは別種のものである。「戦争の危険性」は、確かに国際関係の基本的特徴であるが、貨幣保有の最大化が欠乏への処方箋であるのとは異なって、権力の最大化が戦争の危険を回避

する唯一にして最大的手段であるわけではない。たとえば国家が勢力均衡政策を追求する場合、盲目的な権力増強はある意味自殺行為であろう。さらに権力は、その正確な測定が不可能な手段でもあり、また戦争を回避することがつねに最大の政治目的というわけでもない。諸国家は、多様な目標の下に行動しており、ある場合には、自らが代表し、守護する共同体の名誉と栄光、自由と尊厳のために戦いを選択することもありえるからである。国家が掲げる最終目標、ここから私たちは出発せざるをえず、この最終目標を国家間の力関係から導出することは不可能であるし、国家が手段として用いる権力の具体的な形態と構成要素もまた、結局は、諸国家が自らの歴史的責務として果たそうとする目的をめぐる国際関係の歴史のなかでのみ叙述することができるものなのである（MJ, 29）。

以上の議論から導き出される結論は、国家の外交・戦略行動は、国内政治や経済分野における行為とは異なり、複数の自律的決定主体が織りなす「多様で曖昧な目的の下、不確定で移ろいやすいルールによって遂行される競争的行動」であるがゆえに「非決定的な」特質をもつということである。そしてこの外交・戦略行動が本質的に非決定的であることによって、アロンが提示する国際関係の社会的行為の理論そのものが、その内部に「不確定性（indeterminacy）」を住ませることになるとホフマンは主張する。ホフマンの議論を以下、簡潔に要約しておこう（MJ, 29-31）。

①諸国家は、つねに唯一の目標を単一的手段で追求しているわけではなく、複数の目的を時間の経過とともにその優先順位を変化させながら、自らが定めたルールに従いつつ状況に規定されながら、（軍事力を含む）利用可能な手段の選択によって追い求めている。

②その分析のためには、まず国家間の力関係の把握が必要であるが、上述の通り、その正確な測定は難しい。また国際政治の「ゲームのルール」をめぐる国家間の相互認識の有り様や外交政策の目的と手段に関して国家指導者や体制イデオロギーが付与する意味づけの分析も不可欠となるが、それらの要因は、まさに主観的であるがゆえに、定量分析にはなじまず、

さらに個々の目的を特定できたとしても、その目的と手段の関連づけが適切であるかどうかについては、当事者である国家指導者も観察者である理論家も推論を誤謬なく行える保証はない。

③したがって国際関係は、諸国家の力と利害をめぐる「厳密な計算の連鎖」というよりは、つねにリスクをはらんだ「一連のギャンブル」と似たものとなり、分析対象がこのような「ゲームと闘争の混合物」である以上、国際関係の理論は、国家の外交・戦略行動の行く末を正確に予測し、国家指導者に対して遂行すべき「合理的政策」を提言できる類の自己完結した理論として自らを揚言することはできなくなる（MJ, 30）。すなわち国際関係の領域では、限定された少数の仮説から結論を論理的・数理的に導出する演繹的な手法の適用は不可能であり、抽象的な理論や概念を社会学的・歴史学的研究から区別することには意味がなく、国家間関係全体の作動原理をそれを構成する諸国家の特徴から分離することも難しい。具体的で実証的な社会学的・歴史学的研究のみが、国家の外交・戦略行動やその対外関係認識を明らかにし、個々の紛争に賭けられた国家利害の主観的内容を解き明かすのである。このような意味で、アロンの主唱する国際関係の社会的行為の理論は、その認識論上の定義において「不確定的」なのである。

ホフマンによれば、『諸国民間の平和と戦争』において「戦争の危険」は一貫して議論の通奏低音を成している。また第1部「理論」と第2部「社会学」では、一般的紛争と区別される国家間の政治的暴力としての戦争をめぐる理論的・社会学的考察が詳述されている。結論は、国家の外交・戦略行動の非決定性と国際関係理論の不確定性の確認であり、国家間関係における「戦争の危険」の存続である。理論は、暴力の偏在性、利害の多元性、価値の相対性の下、自律的決定主体が複数存在するという国家間関係の特質から論理的に外交・戦略行動に伴う各種推論の不確実性を導出し、社会学は、「好戦的制度」の社会的起源をめぐる考察から戦争原因の多様性とそこに由来する戦争の社会学的不確定性を論証する。というのは、国

家による権力と利害の測定には上述の通り不確実性が残存し、目的と手段連関をめぐる推論には誤謬がつきまとう以上、また戦争原因を一般的な形で社会的に特定することができないのなら、いつなにが原因で戦争が勃発するかわからないからである（MJ, 37-38）。

戦争がいつどこで起こるかわからないからといって、思考停止に陥ってよいというわけではむろんない。歴史の行く末は霧のなかに閉ざされることが多いとはいえ、他方、霧のなかにも進むべき一筋の道は存在する。国際関係を考察する者がなすべきことは、つねに存在する「戦争の危険」を見据えながら、国家の外交・戦略行動の非決定性に由来する国家間関係の不確実性が諸国家の判断にいつどのような形で影を落とし、どの程度その行動を制約するのかを具体的に検討し、かかる検討を通して、進むべき一筋の道、平和へと至る一筋ではあるが、長く曲がりくねった細い道を歴史のなかに見出す努力をすることであろう。アロンが『諸国民間の平和と戦争』の後半部分（第3部「歴史」と第4部「実践学」）で企図したのは、そのようなことであったとホフマンは述べている（MJ, 34, 38）。

第4部「実践学」では、第3部「歴史」での初期冷戦史の検討を念頭に置きながら、異質性と二極性を特徴とする冷戦期国際システムにおける道義と平和の問題が論じられているが、ホフマンによれば、アロンの議論の出発点は、ウェーバーを継承し乗り越えることであった。アロンは、国際関係理論が国家間関係の行く末を正確に予測できないことを承認する点では、ウェーバーの社会科学方法論に忠実であったが、他方、自らの価値判断の根拠を社会的・歴史的事実のなかに基礎づけることによって、ウェーバーの価値相対主義からの脱却を企図し、そのためには、哲学と社会科学の有機的結合が必要であると確信していた。すなわち善意が意図せざる破局を引き起こす危険に配慮したうえで何ができるかを考え、自らの理想を実現するためには、今後どんなに狭く厳しい歴史の隘路を歩まねばならぬのかを知りたいと願うならば、哲学者は、正義の原則に叶う公正な社会秩序の探求という西欧政治思想の伝統に則って、しかし冷静かつ誠

実に社会科学上の知見を吟味し、平和の可能性を慎重に検討する必要があるのである（MJ, 39）。

戦争の宿痾を克服し、安定した平和を確立するための考察の出発点として役立つ社会学的分析の好例として、ホフマンは、第2部「社会学」末尾の第12章「好戦的制度の起源」において展開されたアロンの議論を挙げている。アロンは、同章で戦争という好戦的制度の起源を多角的に検討したのち、「戦争は歴史上つねに人間の好戦性を表現するもののひとつであり続けてきたが、決してその必然的な表現ではない」と結論づけているとホフマンは指摘し、つまりそこでは「平和の不可能性は論証されてはおらず、アロンの社会学的分析はカントの推論を裏づけるものである」とホフマンは論じている（MJ, 40）¹⁰。

そしてホフマンは、アロンが引き続き第3部「歴史」において冷戦初期の時代状況のなかで核時代の戦争と平和をめぐる諸国家に許容された外交・戦略上の「行動の自由」と「選択の幅」に関する精緻な分析の結果得た結論を次のように要約している（MJ, 40-42）。すなわち核時代以前、戦争は必然的ではなかったが、恒常的なものであった。核時代の今日、戦争は不可避ではないが、いぜんとして可能である。たしかに全面核戦争の恐怖が戦争の掛け金を著しく釣り上げたが、「憎みあう兄弟（les frères ennemis）」としての米ソ関係は、力の二極化による構造的対立であると同時に体制の正統性をめぐるイデオロギー的相剋でもあった。したがってヨーロッパの分断、第三世界の争奪、軍拡競争という冷戦を規定する諸要因が存続するがぎり、また戦争の勃発を抑制する制度的要因（たとえば国連）が脆弱であるがゆえに、体制が掲げる根本的価値の擁護のために、あるいは限定的な利得の獲得を目指して、戦争がある特定の局面においてはある特定の国家にとっては「妥当な政策」として成り立ちえる可能性はいぜんとして存在しているのである。さらに核抑止の信憑性が、敵の国家と社会全体を破壊する核兵器の能力それ自体よりもその使用意思の如何に掛かっており、それゆえそれは「政治的意思」をめぐる心理ゲームという点

で、誤認と暴発の可能性をつねに秘めているのである。たしかに『諸国民間の平和と戦争』刊行直後の62年10月、キューバ・ミサイル危機が例証してみせたように、米ソには「暴力の抑制」に向かう傾向が存在することにアロンは気づいていたが、かといってアロンはそれを過大視していたわけではない。結局、戦争は社会的には不可避ではないとする前述の考察もあわせて考えると、「平和は人間的には達成可能であるが、今日の国際システムはそれを保証しはしない」ということになる（MJ, 42）。

以上が『諸国民間の平和と戦争』が執筆された1960年代初頭の歴史的問題状況であり、第4部「実践学」は、それを前提に、それに対応する形で書かれた核時代の戦争と平和をめぐるアロンの政治哲学である。その骨子をホフマンに従って、以下簡潔に要約する（MJ, 42-47）。

①国家の外交・戦略行動の非決定性は、戦争を回避し平和を構築しようとする国家指導者にどのような実践上の困難をもたらすのか。これが基本の問いかけである。国家の外交・戦略行動が本質的に非決定的で、ゆえに国際関係理論が不確定性を内在させ、国家の外交・戦略行動に関する合理的推論を十全になしえないということ、したがって国際関係の理論は、国家の外交・戦略行動の行く末を正確に予測し、国家指導者に対して遂行すべき「合理的政策」を提言できる類の理論ではありえないということは、繰り返し強調されてよい。そして外交・戦略行動には、次のような特性もある。

外交・戦略行動は、社会的であると同時に非社会的である。武力行使の可能性が国家の外交・戦略行動を非社会的なものとするが、他方で諸国家は、国家間の相互関係を計算し、武力と同程度に他国の説得に意を注ぎ、戦うときにはぎりぎりまで大義名分を見つけようと努力する。そのかぎりにおいて、国家の外交・戦略行動には社会的側面がみられるのである。そして国際政治を生きる誰しもが平和への希求と自らが属する集団への連帯のあいだで我が身を引き裂かれているのである（MJ, 42）。

国際関係に内在するこの二律背反からアロンが「マキアヴェッリ的問題 (le problème machiavélien)」と「カント的問題 (le problème kantien)」と呼ぶ外交・戦略行動上の実践規範をめぐる問題が導出される。「戦争の危険」を見据えながら、国家指導者は、どのような価値の立脚して国家目標を設定し、その目標を追求するためにはどのような手段を選択しなければならないのかを考えると同時に、他方、そのような国家目標と手段の選択がいかなる形で世界平和に貢献しうるのかも考慮しなければならないのである。述べるまでもなく、前者がマキアヴェッリ的問題、後者がカント的問題であるが、いずれも正しく対応するのは困難な問題である。ある特定の価値を自らの正義として声高に叫ぶことなら誰にでもできようが、それを実現可能な具体的目標に落とし込み、適切な手段の選択によって一貫して擁護し、着実に遂行していくことには、高度な政治的思量が必要であろう。また政治が数多くの目的と手段の選択をめぐる不完全情報下における時間制限ゲームであることを本質とし、さらに国際政治が戦争の影の下で展開される合理的目標をもたない状況ゲームであるとするならば、事態はますます困難なものとなる。追求すべきは「合理的な戦略 (stratégie rationnelle)」ではなく「筋の通った妥当な政策 (politique raisonable)」であると論じることは大切であるが、しかし国家の死活的利害の優先と世界平和の擁護とのあいだにみられる二律背反は、いったん国家間関係が危機的局面に入り込んでしまうと、優れた国家指導者にとっても容易に克服できるものではなく、何かを達成しようとするなら、何かを犠牲にしなければならなくなる。このような文脈のなかで国際関係理論は、国家指導者に対していったい何を助言することができるのだろうか。「慎慮の道徳 (la morale de la sagesse)」がアロンの用意した回答であるとホフマンは述べている (MJ, 42)。

②理論の役割を概念的道具立ての整備に限定し、現実の事態を分析する際には、社会学的・歴史学的論証と西欧政治思想の古典との対話を重視することによって、アロンは、文字通り、権力政治が全面的かつ無制約なも

のに激越化する傾向を示す国家間関係において、たやすく「ならず者の道徳 (la morale du milieu sans foi ni loi)」に転化するマキアヴェッリ主義的な「闘争の道徳 (la morale du combat)」を越えて、さらには現実的な力の裏づけを欠くカント主義的な「法の道徳 (la morale de la loi)」の誘惑にも打ち勝って「慎慮の道徳」の必要性を説いているが、その道徳は、国家の外交・戦略行動の非決定性に由来する国家間関係の両義的で二律背反的な特性の自覚に根ざす人間的叡智に立脚したものであり、その実践上の含意は、希望と現実を峻別し、局外者ではなく歴史の現場に佇む一人の人間として、遠くから聞こえるオフサイドの声に耳を澄ませながら、良識が発する警句を肝に銘じて、節度を保って慎重に行動することである¹¹⁾。それは、ある意味、「人間存在の限界を受容する」無神論的ヒューマンイズムの立場に近いものといえるかもしれない (MJ, 42)。ホフマンによれば、アロンが主唱する「慎慮の道徳」とは、世界をあるがままに見つめ、暴力の抑制をなによりもまず優先し、可能で望ましければ、妥協を厭うものではないが、無原則な屈服を容認する奴隷の精神ではない。それは、自らが信じる価値のために闘うことを喜びとし、義務とするものであるが、その実現可能性をめぐるっては、なんら幻想を抱くべきでないことを同胞に呼びかける良心の声なのである。

アロンは、『諸国民間の平和と戦争』第4部「実践学」の後半部分で「権力政治を超える道」を探求し、戦争の根絶と恒久平和確立の可能性を詳細に検討しているが、その結論は決して人類を勇気づけるものではないとホフマンは論じている (MJ, 47-49)。「法による平和」も「帝国による平和」も約束された平和の礎となるには脆弱すぎる。諸国家からなる社会が平和的に機能するためには、カントが予見したように国家間に同質性がなければならぬが、それは現状とかけ離れており、たとえば欧州統合は地域的な連邦を可能とするかもしれないが、世界連邦の実現には人類史の刷新に匹敵する出来事が必要であり、近い将来にそれを期待することは難しい。「帝国による平和」に関するアロンの結論もまた曖昧なものであるとホフ

マンは指摘し、「現状では、帝国は割にあわないし、いわんや帝国を押しつける戦争はさらなる負担を強いるものなのだが、長期的には、人口増加を背景とする資源と空間をめぐる諸国家の競合が帝国をふたたび世界を統べる主人として『合理的なもの』とするかもしれない」と述べている（MJ, 48）。結局、戦争の必然性も、安定した平和の可能性もともに論証不可能であり、なすべきことは、ユートピアへの憧憬から身を引き離し、世界をあるがままに見つめ、人類が幾世紀もかけて達成してきた遺産を継承し、一步一步事態を改善する方向で努力し、世界を共通の住処とする「人間の良心の萌芽」が育っていくのを辛抱強く見守ることである。これが『諸国民間の平和と戦争』の結論であるとホフマンは語るののである（MJ, 48-49）¹²⁾。

3. 「響きと怒り」におけるリベラリズムの位相

ホフマンは、アロンの死後、アロンの国際関係理論に対する貢献を回顧した論文のなかで、アロンの国際関係理論の規範的側面を暴力的な歴史と平和的な理想とのあいだの矛盾、武力の使用がいぜんとして可能であり正当である世界のなかで自国の利害の擁護者として行動する責任を有する政治家の双肩にのしかかる種々の制約要因の重みと、国際関係の血塗られた歴史に抗議の拳を振りかざし世界平和を要求する良心の声とのあいだの二律背反として理解できると論じている。そしてホフマンは、アロンは国家指導者の立場に身を置くことによって¹³⁾、その「批評の自由」を自ら制限し、彼のなかにあるカント的資質を封じ込めていると主張する。

アロンは、情熱的なリベラリストだが、人類の諸集団間の関係が最終的には定言命令によって律せられるような平和的な世界の到来など不可能であると確信していた。良きカント主義者として彼は、不可能なことを達成す

べき道徳的義務などないことを知っていた。アロンは、読者に、あるがままの現実の世界では、しばしば暴力こそがリベラルな諸価値の存続を可能にしてきたことを想起させ、リベラリズムが開花した数少ない国の生存と解放が暴力によって達成され、全体主義に対する防衛を保障したのも暴力であったことを思い出させた。彼にとっては、幻想の危険性を読者に知らせることのほうが、世界がどのようなものであれ、市民や政治家が過去に比べて一層努力すれば、集团的暴力の根本原因を除去することができ、永続的な平和の基礎を固めることが可能となるような、そんな方法の探求よりも重要であった。アロンは、彼の抱く基本的諸価値と矛盾する国内的な事態や出来事に立ち向かうことにはほとんど躊躇しなかった。彼は、1930年代において〈全体主義〉体制というカテゴリーを生みだした者のひとりであった。しかしアロンは、国家の対外行動に判定を下すことにはつねにより慎重な態度を崩さなかった。たとえば米国のヴェトナムでの行動やその地におけるいくつかの望ましからぬ振る舞いを非難することは、つねに差し控えてきたのである¹⁴⁾。

ホフマンは、アロンの肖像画をこのように共感をこめて描いているが、彼自身の立場はアロンから出発しながらアロンとは異なっていた。ホフマンは、「ミネルヴァとヤヌス」の結論部分において、慎慮と抑制というアロンが掲げる西欧政治思想の古典に端を発する伝統的叡智に対してある種の危惧を示している。伝統的叡智は、たしかに国際場裡における思いこみとイデオロギーに対する解毒剤ではありえるが、国際社会の未来への希望と構想力の土台とはなりえないのではないか。西欧古典の著述家たちは、人類の好戦的な歴史が歴史の終焉と同義ではなかった幸福な時代の住人ではなかったか。私たちは今や、核兵器という国際政治のゲームそれ自体を、歴史そのものを終わらせることができる道具を手に行っているのである。たしかに国家の外交・戦略行動に内在する二律背反を克服することは難しく、不可能なことをなすべき道義的責任は存在しない。しかしそれに

もかかわらずとホフマンは考え、次のように問いかけている。「二律背反に満ちた世界を息のつける世界とするためにできることをすべて行うことは必要である。しかしそれではおそろしく十分ではないのだろう。そしておそろしく十分なこと、つまり二律背反それ自体の解消は、おそろしく不可能なのだろう。このように考える理性とは、何事にも挑戦しない理性なのではないだろうか。」(MJ, 52. 強調は原文) アロンを越えて「権力政治の彼方に」勇気をもってもう一步踏み出す必要をホフマンは感じていたのである。

ホフマンもまた、アロンと同様、共通価値の不在を前提として展開される国家間政治の暴力的な現実から出発している。しかしホフマンは、アロンから一步離れて、自分のなかにあるリアリスト(ルソーの誘惑)とアイデアリスト(カントへの憧憬)の併存をはっきりと自覚しながら、両者の緊張を維持することこそが世界に関わる最良の方法であると確信していた。そしてホフマンは、歴史の激動のなかで人間の自由の可能性を追求するために、戦争と平和をめぐる個々の行為主体の選択の自由をめぐる問題をアロンのように国家指導者にのみ限定するのではなく、より広い視野で考察することが重要であると考え、そこに国際政治学者としての自身の原点を求めていくのである。そのことを明晰かつ体系的に提示しようとした試みが「響きと怒り—歴史のなかで戦争に対峙する社会学者—」であった。そして述べるまでもなく、選択の自由がある程度存在し、人々に複数の選択肢が提示されるとき、そのとき初めて、選択をおこなう人間の道義的責任の問題が生じてくるのである。

国際的な出来事、とりわけ戦争において、人間に残された選択の幅はどの程度のものなのか。人びとは国際関係上の出来事に対してどのような影響力を行使できるのか。それとも彼ら彼女らは、自らが制御することができない諸力に支配されるたんなるチェスの駒なのか。もしそうだとするならば、人びとの行動を支配する諸力とは、物理学が自然のなかに見いだすような必然性の法則なのか、それとも運命の女神の自由勝手な気まぐれなのだろうか(SF, 255)。自由と必然性をめぐるこのような問いかけに答え

ること、それが「響きと怒り」の執筆意図であった。そしてこの文脈で戦争の意味を考える場合、なすべきことは、誰にとっての「意味」かを確定することであるとホフマンは論じている（SF, 260）。第一に、戦争の記録の外側に立ち、いわばそれと切り離された形で記録を調べ考察する社会学者と戦争の記録のなかに捕らわれている歴史的な行為主体とを区別しなければならない。そしてさらに歴史的行為主体を三つの水準に区分する必要がある。すなわち「機械の歯車」の如き私的で無力な個人のレベルと、共通の歴史を生き、戦争という暴風に揺り動かされる諸個人の集合体である社会全体のレベル、そして国際関係のなかで種々の決定をなしていくと考えられている国家指導者のレベルである。戦争の意味という問題に直面する社会学者は、この三つの水準すべてにおいて考察を進めねばならず、そしてその都度、歴史的行為主体にとっての戦争の意味を彼自身にとっての戦争の意味から明確に区別しなければならない。ある行動が特定の行為主体にとってどのような意味を持つかを理解すること、それは戦争の意味を考えようとする社会学者の責務である。したがって「理解しようと努力する一人の社会学者は、人間の運命に思いをはせる一人の人文主義者、社会の発展に関心を寄せる一人の歴史家、競合する諸単位の行動を研究する一人の国際関係の専門家以外の何者にもなりえないのである。」（SF, 260-261）ホフマンは、そのような社会学者となることを望み、繰り返される戦争のなかで、個人の自由を押しつぶそうとする歴史の暴力に抗して、「歴史による人間の価値の剥奪」ではなく、人間の自由な意思と行動による歴史の創造に貢献することを生涯の目標として設定したのである（SF, 258）。そしてさらにここで重要なことは、ホフマンが核時代における「戦争の危険」を真摯に受け止め、平和を構築する人間的自由の可能性を追求した結果、アロンよりももう一歩だけカントに近づこうとしたことである。以下、この点をもう少し詳細にホフマンの議論のなかで追いかけてみることにしよう。

「響きと怒り」のなかでのホフマンの議論を要約すると、まず最初に彼

は、トルストイが『戦争と平和』のなかで示した歴史哲学を批判的に検討することによって歴史のなかで戦争と対峙する社会科学者の使命について自らの立場を表明する¹⁵⁾。そして彼は、戦争の意味と人間の自由について歴史社会的な視点から上述した「個人、社会、国際関係」の三つの水準ごとに多面的な考察を試み、その考察の結論として、人類は今や戦争の意味も人間の自由もともに否定する全面核戦争の恐怖の下で生きており、全面核戦争の回避が人類共通の課題であることを確認する¹⁶⁾。すなわち尽きざる戦争の連鎖のなかで苦悶する現代世界にあっては、戦争の廃絶という希望を堅持しつつも、当面の責務は、核のホロコーストを回避し、戦争によって解き放たれる暴力のレベルをできるかぎり低く押さえこむことによって¹⁷⁾、少なくとも国家指導者には戦争を制御するために必要な最低限の行動の自由を与え¹⁸⁾、さらに統治者、被統治者を問わず、戦争に動員されるすべての人びとに対しては、戦争がかつて歴史上持っていた「闘うことの意味」¹⁹⁾を一たとえその一端しか示しえないとしても一ふたたび開示する真摯な努力こそが重要であるとホフマンは論じている。

しかし他方で、20世紀の全体戦争の経験、とりわけそこで放出された暴力の総量に思いをいたすとき、戦争を制御し、戦争に意味を与えようとする、このような努力はほとんど無意味かつ絶望的で、あらかじめ失敗を予告されたもののようにもみえる。全体戦争という虚無の怪物は、いったん解き放たれてしまえば、誰もそれを止めることはできず、すべてを食らい、すべてを飲みこみ、その帰結するところは、核による全面的で徹底的な破壊となるであろう。もしそうだとするならば、人類の希望はいったいどこにあるのだろうか。ホフマンはそのように問い、最後にもう一度、歴史のなかで戦争と対峙する社会科学者の使命について考察している。

ホフマンによれば、戦争のような複雑な社会現象の解明に取り組む際、社会科学にできることはきわめて限られているという。というのは、社会科学は、いかに多様な方法論上の模索を試みようが、最終的には因果関係の分析にその学問的基盤を置くものであり、戦争を分析するとき、その原

因を単一要因にではなく多様な因果関係の連鎖に求めることは妥当なのであるが、そのような多様な因果関係の分析は、あまりにも複雑すぎて科学的な取り扱いには馴染まないからである。したがって社会学者がなすべきことは、第一に戦争を引き起こす多様な要因間の複雑で迂余曲折に満ちた因果関係分析の困難さに基づく社会科学的な知識の限界を自覚することであり、第二に事例研究のために有益な分析手法を考案することを通して、個別の戦争を具体的にひとつひとつ検討していくことである。したがって事例研究の積み重ねが重要となるが、ただし個別の研究の集積の先に戦争の一般理論の構築が可能であるかという点、それもまた難しい。というのは、多様な戦争原因間の優先順位の設定は、個々の研究者が選択する研究の目的と手法に左右され、その意味で研究者によって主観的に決定されるものだからである。つまり「同一の現実の多様で異なる読解が可能となる」わけである（SF, 274）。ホフマンはこのように指摘したうえで、次のように論じている。

社会科学にできることは、人間の衝動や思想、非人格的諸力、国家の計算や反応、指導者の個性がある特定の状況下でどのような論理に従って相互に影響しあい、手段として、はけ口として、あるいはまた結果として、戦争に訴えることを現実の選択肢として浮上させてくるのかを明らかにすることである。そして社会科学はそれ以上の課題を果たすことはできない。なぜならば、現実がそれ以上の確実性の追求に適さないからである。社会的現実、アロンの区分に準拠すれば、一定程度の必然性（例えばアロン自身の例示を借りれば、工業化の進展）を内包しており、そのことによって現実はいっぴくバラバラな非構造的な様相を示すことはない。だから現実の記録を読み解くいかなる作業においても、現実は見かけ上は論理的に首尾一貫し、もっともらしいものとして理解することができるのである。他方、社会的現実、一定程度の人間の行為をも内包しており、この人間の行為によって、必然性がもたらす不可逆的な社会過程には数多くの遅延

と促進、歪曲と粉飾がもたらされえるのである。必然性の部分は、私たちに確実性と予測可能性を与えてくれる。ただしその確実性と予測可能性は最低限のものにすぎない。というのは、それはきわめて長期に物事を眺めた場合にのみ現れるものだからである。そして私たちがもっとも欲している予言は、人間の行為の分野、すなわち不確実性の領域にかかわるものなのである。人間の行為の分野は数多くの謎に満ちている。さまざま人間の行為によって織りなされる社会的相互作用は、(とりわけ危機に際しては)それ独自の化学反応を示し、その化学反応の有り様は、私たちが個々の人物が下す決定についてたとえより多くのことを知りえたとしても、いぜんとして捉えがたいだろう。またその個々の決定それ自体も、(とりわけそれが切迫した状況下で複数の人間によって下される集団的な決定の場合は)つねに一定程度の偶然性の要素を伴っているものである。したがって人間の思想と生活の一部であるこの謎を完全に解き明かすことは、社会科学の責務とはなりえない。社会科学にできることは、この謎の周囲を取り巻くことである。しかし社会科学は、自らが語る物語が蓋然性や見かけ上の首尾一貫性を示すようになったら、そのときはそこで立ち止まらなければならないのである (SF, 274-275)。

以上のようなきわめて限定的な社会科学の任務規定に対して、戦争の一般理論を求める歴史哲学者(例えばトルストイ)や人間の行為にかんする普遍的法則を探求するコント流の科学主義者は決して満足しないだろうとホフマンは述べている。彼らは歴史や人間の行為のなかにみられる傾向や趨勢を精査し一般的な理論や法則に鍛えあげようとする。しかしそれらの傾向や趨勢のみが歴史の唯一の意味を構成するという考え方は、特定の哲学的偏愛や科学に基づいて真実の一側面を特権的な地位に祭りあげるだけであり、社会的現実はそのような哲学的偏愛や科学とは相容れないとホフマンは指摘している。社会科学は、確かにユートピアの実現不可能性を論証し、天上の王国を地上に招来する企てのもつ危険性に警告を発する。さ

らに社会科学は、抽象的に提唱された行動指針が現実には利益と不可分なかたちでリスクやコスト、そしてときには意図せざる悪しき結果を伴うことを解き明かすが、その同じ社会科学は私たちに次のことをも示唆してくれるとホフマンは述べている。すなわち「私たちの野望をしばしば打ち砕く社会的現実の多義性それ自体が、自由な行動の余地が存在することを私たちに教えてくれるのであり、私たちの行為の意味を特徴づける多義性それ自体が、私たちに社会的現実の意味を与える機会が残されていることを示してくれるのである。」(SF, 275：傍点は原文ではイタリック体)

それでは、社会科学が示唆するように、歴史のなかで戦争と対峙するとき、自由に行動する余地が私たちに残されているとするならば、私たちは今、この人間に与えられた自由をどのように行使すべきなのだろうか。この点をめぐるホフマンの議論は以下の二点に要約することができる。第一に、すでに繰り返し述べてきたことだが、最優先事項は全面核戦争の回避であり、人間に与えられた自由は、その目的に資するかたちで行使されねばならない。すなわち「平和、少なくとも全面核戦争の回避こそが自由と歴史の存続のための前提条件であり、この条件なしには、人類は歴史に意味を与える機会それ自体を失うことになるであろう。」(SF, 275)しかし第二に、現時点で「なにをなすべきでないか」は明瞭である一方、「なにをなすべきか」については社会科学はなにも教えてはくれないとホフマンは指摘している。つまり社会科学は、核戦争を回避する最善の道を示唆してはくれないし、核戦争とは別の形態の戦争が存続し拡散していった場合、そのような世界で平和がどの程度確保されるかについてはなにも語ってはくれないのである。さらに「制御された」限定核戦争が開始された場合、それが全面核戦争の誘因となるかどうかは不明であるし、そもそも平和を訴える良心の声が遵守されるかどうかもわからないのである。こうして人類は、歴史の多義性と良心の道義的命命とのあいだの緊張を生き続けることになり、社会のなかで価値を実現するには代価が必要であるという事実と歴史のなかでその実現を声高に要求する価値とのあいだで引き裂かれ続

けることになるだろう。換言すれば、人類は、全面核戦争の無意味性を自覚しつつ、在来型の戦争の存続による戦争の意味の悲劇性と多義性を経験し続けながら、大規模戦争の回避こそが人類ひとりひとりの道義的責務であるという確信がやがて広がっていくという生まれだての希望を頼りに歴史のなかで戦争と対峙し続けていくことになるのであろう。ホフマンは、このように指摘したうえで、その論考を次のように結んでいる²⁰⁾。

政策の手段としての武力の使用を禁じている国際法は、明らかに事実のずつと先を歩んでいる。しかし大規模戦争の回避こそが人類ひとりひとりの道義的責務であるという確信がもしも広がっていくとするならば、事実がゆっくりと（そして疑いなく長く曲がりくねった道筋を辿りながら）法が指し示す方向に進んでいくと希望することは馬鹿げたことではないのかもしれない。それはまた、哲学者たちがもっとも切迫した道義的責務であると語るころの方向でもある。その目的のために汗を流して働くことは確かに愚かなことではないだろう。政治は、歴史を通して紛争と協力が織りなす多義的な技法であり続けてきた。国内政治は、紛争より協力を重きを置いてきたし、人類が成し遂げた達成の多くが暴力を介して獲得されたことを暴力の批判者たちはあまりにも容易く忘れてしまうが、それでもなお、得失のバランスが明らかに破局に傾いているとき、暴力を正当化したり神聖なものともみなすことは不可能になってきている。大規模な暴力がない世界が正義に満ちあふれた世界でないことは十分にありえることである。というのは、共通の歴史を有するが共通の大義を有しないライバルたちが権力の最高の保持者であり続けるかぎり、大規模な戦争が不在な世界でさえ、社会の方向へ向かうその歩みにもかかわらず、世界はいぜんとして紛争に苦悶し続けるであろうし、そこでの政治は、ほとんどの国の国内政治とは大きく異なったものであるだろう。つまり大規模な戦争がない世界でも、恐らくは継続するであろう不正義と敵意のなかで暮らすことになるということである。そのことに対する不安は確かにあるが、核兵器の拡散が継続

し、それを止める確実な手だてがない状況で、そのような段階に至るのでさえ困難なことに思いをいたすとき、そしてさらに、もしも未来が遠くない過去と類似するならば、人類の滅亡はほぼ確実なものになるという絶望を囚われるとき、人類の滅亡を回避し、眼前の明白な危険を克服し、少なくとも大規模な戦争がない世界に到達するために、私たちがもつ自由を、それがいかなるものであれ活用することは、私たちの義務であり責任なのである（SF, 276）。

これが1960年代半ば時点でホフマンが到達した国際政治をひとりの「リベラル」として生きていくことの意味であり、そこに国際関係における倫理と平和秩序への強い希求があることは否定できないであろう。

註

- 1) Stanley Hoffmann, *Primacy or World Order: American Foreign Policy Since the Cold War*, McGraw-Hill, 1978.
- 2) Hoffmann, *Duties Beyond Borders: On the Limits and Possibilities of Ethical International Politics*, Syracuse University Press, 1981. スタンレー・ホフマン『国境を超える義務：節度ある国際政治を求めて』（寺澤一監修、最上敏樹訳、三省堂、1985年）。ホフマンは、同書の序文および第1章序論で自らの立場を「リベラル」と明言し（“a partisan of a liberal code” [p.xiii] & “I consider myself to be one of those old-fashioned and increasingly dinosaur-like types, a liberal.” [p.8]）、たとえば次のように述べている。「リベラルであるということは、必ずしも進歩を信奉していることを意味するのではなく、ただ単に、人間と社会が完成に近づきうる存在であること（これは限定的でもありえようし、可逆的でもありえよう）を信じ、特に、社会をより人間的かつ公正にし、市民の境遇をより良くしうる諸制度が合意の基礎の上に作られる可能性を信じている、ということだけを意味しているにすぎない。」（p.8：邦訳10頁）。
- 3) Hoffmann, “Liberalism and International Affairs” in Hoffmann, *Janus and Minerva: Essays in the Theory and Practice of International Politics* (Westview Press, 1987), pp.394-417. 同論文のなかでホフマンは、自己のリベラルとし

での立場を次のように要約している。「現在、リベラリストは、三つのグループに分かれているように思われる。第一のグループは、自由と全体主義の偉大な闘争の場として世界を分析する。このグループに属するリベラルたちは、全体主義にたいする十字軍の闘士となってきた。その代償は、『自分の国が自由かつ自由のリーダーであるかぎり、正しくても間違っていようと、わが祖国』と声高に叫ぶことであった。第二のグループは、ユーロピアの探求を断念しておらず、国家の武装解除や共同体主義的な慣行・規範・制度の普及を通して、国際政治の論理が最終的に破棄され代替されるための仕掛けを構想し続けている。しかし彼らはいぜんとして次の問いに答えてはいない。すなわちいかにしてその変容を達成でき、私たちは、どうやったらこの世界を離れてそこにたどり着けるのか。私の属する第三のグループは、おそらくその発想の源としてシーシュボスを掲げてきたが、カミュとは異なって、自分たちが幸福だとは思えないでいる。彼らは、国際政治のゲームにできるかぎり多くの自由主義的な価値と配慮を浸透させようと努力しているが、ゲームそのものがこの世界から一掃されてしまうことがないこともまた知っている。しかし国家間の危険なゲームは、もしもそれが過去と同様のやりかたで再演されるとしたら、それは、私たちすべてを破壊と混沌に導くリスクに満ちているのである。」(pp.394-395.) この論文の詳細な検討は、上記二冊の書籍など1980年前後の他の著作と合わせて稿を改めて行いたい。

- 4) Tim Dunne, 'Liberalism,' in John Baylis, Steve Smith & Patricia Owens eds., *The Globalization of World Politics: An Introduction to International Relations*, Fifth Edition, Oxford University Press, 2011.
- 5) Hoffmann, "Rousseau on War and Peace," in Hoffmann, *The State of War: Essays in the Theory and Practice of International Politics* (Praeger, 1965), p.55. 初出は、*American Political Science Review*, June, 1963. 中本義彦編訳『スタンレー・ホフマン国際政治論集』(勁草書房、2011年) 150頁。ただし訳は拙訳。
- 6) Hoffmann, "Minerva and Janus," in Hoffmann, *The State of War*, pp.22-53. 初出は、*Critique*, January & February, 1963. 以下、MJと略記し、頁数を本文中に()で示す。Hoffmann, "The Sound and the Fury: The Social Scientist versus War in History," in Hoffmann, *The State of War*, pp.254-276. 以下、SFと略記し、頁数を本文中に()で示す。中本編訳『スタンレー・ホフマン国際政治論集』429-456頁。ただし訳は拙訳。前者については、拙稿「レイモン・アロンの跡を追って：初期ホフマンにおける『戦争と平和』」(『思想』No.1020, 2009年)を、後者については、拙稿「響きと怒り：スタンレー・ホフマンの戦争論」(『国際地域研究論集』No.2, 2011年)を参照。
- 7) Raymond Aron, *Paix et guerre entre les nations* (Calmann-Lévy, 1962). 以下、引用は1962年の初版に拠り、Aron, *Paix et guerre* と略記する。『諸国民

間の平和と戦争』は、刊行以来、現在まで版を重ねている。その異同について簡単に注記すると、現行の2004年版に至るまで本文自体にはいっさい加筆訂正等が入っていないが、1968年版では、初版のまえがきが削除され、キューバ・ミサイル危機に対する論評を含む新たな序文が付されており、アロンの死の直後に刊行された1984年版には、アロンが死の間際まで取り組んでいた未完の長文の序論が巻頭に置かれている。

- 8) 国際問題がリベラリズムにとって打ち勝ちがたい難敵 (the nemesis of liberalism) であることについては、ホフマンは、後年、次のように見事に要約している。ここでは原文の趣を損なわないため、あえて英文で引用する。‘The essence of liberalism is self-restraint, moderation, compromise, and peace. The state must be kept within its sphere; government can use its powers only in the ways set by law; groups and individuals must avoid trespassing and curtailing each other’s freedom. Conflicts, the stuff of social life, have to be settled by reason – through negotiated deals or by resort to freely established authorities – not by violence. The essence of international politics is exactly the opposite: troubled peace, at best, or the state of war. The ever-present risk of war makes of military power, traditionally, the most important yardstick in the measurement of power; restraint, when it occurs, usually results from deterrence, from the fear or the crush of greater force. Compromises happen and cooperation develops, but both have a way of collapsing when the parties’ interests change and when power shifts. On the domestic scene, liberal institutions aim at compensating for, or discounting, the considerable inequalities of power and wealth among individuals and groups, and at preventing the most powerful and wealthy force itself – the state – from crushing all the others. These institutions do not exist on the world scene, where full play is given – as, indeed, in the jungle – to the inequalities and inequities of power and wealth; there is nothing liberal about the Melian dialogue. If the logic of liberalism is that of the average and the weak individual against the mighty, that of international affairs remains the logic of might and the story of the rise, fall, and succession of the powerful.’ “Liberalism and International Affairs,” p.396.
- 9) Aron, *Paix et guerre*, p.20.
- 10) 「人間という動物は攻撃的だが、人は本能によって闘っている訳ではなく、戦争は、人間の闘争性の表現のひとつであるが、その必然的な表現ではない。戦争は、複数の社会が組織され武装されて以来、歴史上つねに人間の攻撃性の表現であり続けてきたわけだが、おそらく暴力の脅威の完全な除去

は、人間の本性に反するものであろう。あらゆる集団において、不適応者は、法を破り、他人を攻撃するのだから。個人や集団間の争いがなくなるということも、個人や集団の本性に反することだろう。しかしこれらの紛争が、何千年にも渡って私たちにお馴染みの、組織化された戦闘員たちが絶えずその破壊力を増していく道具を用いて闘う、戦争という好戦的制度のなかで具現化されねばならないということは、なんら論証された事柄ではないのである。」 Aron, *Paix et guerre*, p.364.

- 11) 「闘争の道徳と法の道徳を乗り越えることができるのは、私が慎慮の道徳と呼ぶものだけである。慎慮の道徳は、個々の事例をその具体的な実情に即して考察することを試みるだけではなく、原則とその実現可能性をめぐる議論をとともに無視することはせず、諸国家の力関係と諸国民の意思の双方への目配りを忘れない。慎慮の道徳の判断は、複雑であるがゆえにたえず論議を巻き起こし、道義の擁護を説く者もマキアヴェッリ主義者もその結論に完全に満足することはない。天使を演じようとする者は結局は野獣を演じることになる。国際秩序の現状に対して不満をもつ国や革命を企てる国の力と拮抗する力によって支えられるときのみ、国際秩序は維持可能であることを国家指導者は忘れてはならない。もしも力の計算を怠るならば、国家指導者は、その責務を放棄し、彼の職業と使命が要請する道義を失う。そのとき国家指導者、たんなる過誤だけではなく、道徳上の罪をも犯すことになるのである。なぜならば、彼の手にその命運が託されている人びとの安全と理念とが危険に晒されるからである。利己心は決して美徳と呼ぶべきものではないが、何人によってもその生存を保障されていない諸国家は、利己的に行動することを余儀なくされている。しかし他方で、野獣となることを欲する者が天使を演ぜられるわけではむろんない。人間とは所詮、肉食性、捕食性の獣なのだから、そのように振る舞えばよいとするシュペンゲラー流のリアリストは、人間性のもうひとつの側面を無視している。国家間関係においてさえ、思想に敬意を表し、価値の実現を希求し、義務に配慮する側面があることは明白である。諸集団が相互に何も生みださないような形で行動することは稀なのである。慎慮の道徳は、事実と価値の両面で最良の道義であり、戦略・外交行動の二律背反を解消するものではないが、個々の事例において、最も受け入れやすい妥協を見いだそうと努力するのである。」 (Aron, *Paix et guerre*, p.596. 強調は原文) 『諸国民間の平和と戦争』巻頭に掲げられたモンテスキュー『法の精神』からの次の引用は、この文脈のなかで読んでこそ、意義深いものとなる。「万民法は当然に次の原理に基づく。諸国民は、平和にあってはできるだけ多くの善を、そして、戦争にあってはできるだけ少ない悪を、しかも自分たちの真の利益を損なうことなく、相互に行わねばならない。」 (モンテスキュー『法の精神』第1部第1編第3章「実定的法律に

ついて」より〔野田良之他訳、岩波書店、上巻、15頁〕。

- 12) 「好戦的な歴史から逃げだすことなく、理想を裏切ることもせず、平和が可能となるその日まで、戦争の不在を継続するという断固たる決意をもって考え、行動すること。いつか平和が可能になると信じながら。」Aron, *Paix et guerre*, p.770. 『諸国民間の平和と戦争』の結語である。
- 13) アロンは、ドイツでヒトラーの権力掌握を目撃したのち、ヨーロッパの将来に対する不安を抱いて帰国したフランスで「ドイツと遠くに望まれる危機の兆しについてすばらしい話をされたあなたが、首相や外務大臣であれば何をしますか」と外務大臣のエリオから問いかけられ、答えに窮した1932年のある出来事を「50年を経た今も私にとっては生々しい現実である」と回想し、そこから「政治について思考することは政治の当事者について考えることで、当事者の決定、目標、手段、精神世界を分析することだ」という教訓を引き出している。Aron, *Mémoires: 50 ans de réflexion politique* (Julliard, 1983), p.59 et pp.79-80. 三保元訳『レーモン・アロン回想録』、第1巻「政治の誘惑」、60頁、84頁。
- 14) Hoffmann, "Raymond Aron and the Theory of International Relations," in Hoffmann, *Janus and Minerva: Essays in the Theory and Practice of International Politics* (Westview, 1987), p.62. 初出は、*International Studies Quarterly*, Vol.29, March 1985. 中本編訳『スタンレー・ホフマン国際政治論集』205-206頁。ただし訳は拙訳。
- 15) 「私が提唱するアプローチでは、自由と必然性の対立という問題にあらかじめ判定を下すことは却下される。すなわちここでは、トルストイと同様に自由と必然性の証拠をとともに探しながら、自由は幻影であると最初から言明することは避けたいと思う。さらにこのアプローチでは、歴史は人の制御できない力によって支配されているかもしれないが、人間の営みにおいては、必然性それ自体が人間自身が創り出したものだと思いたい。というのは必然性にはふたつの種類があり、そのふたつのあいだには少なからぬ相違が存在するからである。ひとつは、神や摂理、運命や自然といった外側から負荷される必然性、承認することはできるが理解はできず、ただ崇敬したり（あるいは罵ったり）する類の必然性である。もうひとつは、統御されていない人間の動きに起因する必然性、人間行動の統計学上の規則性や人間の意図の気まぐれな相互作用、あるいは意図と結果の対照性や意志と（神秘的ではない）経験的な力との衝突の結果生まれてくる必然性、そしてさらには行き着くところがどこなのか、その魔法の力を自覚していない人間たちによって解き放たれた諸過程の逆らいがたい影響力によって生じる類の必然性である。このような矛盾、競合、繰り返しは、神や自然によって計画されたものかもしれないが、その計画がどのように実現していくかについては、非神秘的な用

語法で説明することができるし、少なくとも私たちは、そのように努力しなければならない。神や自然によってなされた計画のなかにも人間の占める位置があるというまさにこの確信ゆえに、私が提唱するアプローチでは、人間の営み・出来事にかんしては『なぜか?』という問いは『どのようにして?』という疑問とけっして切り離されてはならないのである。私たちが探し求め、あるいは発見するかもしれない社会の動きや人間の行動にかんする法則は、歴史のなかで明らかになっていく人間性の現実的な多様性と複雑性のなかに根をはり、そこから成長していくものである。いかなるアプローチせよ、その関心が『どのようにして?』という疑問にのみ集中してしまうならば、そのようなアプローチは、人間が政治的存在、すなわち目的を追求する存在であることを忘れてしまうことによって、文字通り人間を物としてしまい、歴史における人間の研究から歴史に対して人間自身がおこなう貢献のすべてを奪い去ってしまうのである。したがって私が提唱するアプローチの最後の仮定は、『社会学的決定主義』は無生物の対象を規律するのと同じ秩序をもつものではなく、その法則はより条件づけられ、より制限されているということである。そしてその法則の性質は、要するに（物理学の法則のように）記述的で、（因果関係分析という意味で）説明的で、（心理学的理解というウェーバー的な意味で）了解的なものなのである。トルストイは、ある種のパターンが存在するという仮定から出発するのに対して、私たちは、もしかしたらそのようなパターンの不在を明らかにするかもしれない概念から出発するのである。」(SF, 258-259: 傍点は原文ではイタリック体)。

16) この点に関するホフマンの印象的で半ば黙示録的な論述を二カ所引用したい。

①「リスクなしの殺人、匿名性に覆い隠された虐殺、敵の人間性の否定が跋扈する現代の全体戦争においては、国民的な忠誠心が要求する良心の犠牲の程度は、前代未聞なものとなった。正義の戦争という観念が包含し正当化する犯罪の範囲は、その正当化自体の妥当性を深刻に問うほどまでになっている。もし今後、全体戦争が大規模核戦争に取って代わるならば、悲劇性はたんに多義性を伴うだけではなく、純粹かつ単純な不条理によって同伴されることになるだろう。全滅が戦闘の結果生じる危険な可能性のひとつにすぎなかった時代に戦争が個人に対してもっていた意味は、もし全面的な破壊が確実ならば、消え去ることになるであろう。そして戦闘を通して共同体の全滅が確実な時でさえ戦争に認められていた意味、それは、現在の恐怖や不正は、将来なんらかの形で正され回復され正常に復するだろうという望みのなかに見いだされる意味なのであるが、そのような意味でさえ、未来それ自体が不確かになるならば、消滅してしまうであろう。その場合、戦争は、現世における生の喜びと悲しみのなかに死後にお

ける永遠の生の序曲を見いだすことのできる人びと、この地上には自律的な意味などなんらないと考えている人びとにとつてのみ意味あるものとなるだろう。核戦争の可能性は、ホブズの哲学に光を投げかけている。幾世代もの人びとにとつての戦争や戦死の意味は、共同体の原則のなかにみつけれられてきた。もし共同体が人びとを完全な破壊へと運命づけるならば、情性と強制以外のなにが、人びとの国家への帰属を維持するために役立つのだろう。相争う複数の共同体の狭間であつて、人びとが核による死を回避するために連帯し団結するならば、それは、事実上、国民的な連帯と団結を解体することになるはずである。」(SF, 262-263: 傍点は原文ではイタリック体)。

- ②「全体戦争とは、それがもし(クラウゼヴィッツのいう)戦争の本質を示すと同時に、戦争はそれ独自の文法をもつが、独自の論理はもたないという彼の主張を劇的に否定する『絶対戦争』でないとするならば、いったい何なのであろうか。全体戦争とは、それがもしゲームのルールと制度の自己破壊でないとしたら、いったいどのようなものなのだろうか。それがもし政治的計算を軍事的必要に従属させるフランケンシュタインのようなテクノロジーの怪物でないとしたら、それがもし政治的考慮が完全に消え去るまで公衆の情熱を政治社会に注ぎこむヴァンパイアでないとしたら、それがもし国家の政治指導者に倫理的配慮の可能性を無にするような選択を強いるミノタウロスでないとしたら、いったい全体戦争とは何なのであろうか。今日、政治指導者は、悲劇性を不条理と混ぜあわせた類の全体戦争勃発の危機に瀕して暮らしかつ行動している。臨界点を超過してしまえば、政治的・道義的考慮など一瞬のうちに消滅してしまうであろう。国家統治術は、大規模な核戦争では意味を失い、そこではいかなる政治目的も叶えられず、目的を制限し手段を限定することを期待されたいかなる道義的行動にも存続の余地はない。核戦争を目前にした政治家は、悲劇的な人生を歩むこととなり、道を一步踏み誤れば、彼の人生はただちに不条理なものとなる。すなわち生き残る必要から武力に頼ることを正当化した彼の決断が意味をもつのは、ただ抑止が機能したときのみである。もし彼のギャンブルが失敗に帰すならば、プレイヤーだけでなくゲームそれ自体が破壊されるだろう。もし戦争がかつて戦争を手段と見なした人びとの主人となるならば、ゲームの意味は見失われる。歴史上初めて、ゲームの基本的前提が、つまり勝利した者か、あるいは生き残った者がゲームを続けていくという前提それ自体が、脅威に晒されているのである。政治指導者たちが自然状態を全面的な大虐殺という完全に非社会的で反社会的な場に変えてしまうか、さもなくば、戦争は飼ひ慣らされなければならないだろう。そしてその場合は、国際場裡は、かつてないほどに社会的なものとなるで

あろう。」(SF, 267)。

- 17) ホフマンによれば、今日の悲劇性はまた、新しい戦争手段が戦争からその歴史的機能の大部分を奪い取る一方で、それにもかかわらず戦争の社会的機能が消滅していないということのなかにもある。戦争がもたらす歴史的变化の諸例は、今日では、各国内部の国内的努力によって非暴力的に達成されるか、あるいはまた(戦争を随伴することもある)革命的暴力を通して実現されている。換言すれば、変化の国内的プロセスが国家間戦争に取って代わったということである。しかし他方で、国家を統合する機能をもつ闘技的戦争は、不完全な諸国家・諸国民に満ちあふれたこの世界でこそ存在意義をもつものとみなされてきたし、たとえ利得を求める戦争の大部分が対価に値しなくなったとしても、戦争が手段として機能しうる目的は他に多数残されている。核戦争でさえ、先制第一撃の効力を信じる人びとにとっては、意義あるものかもしれないのである。「したがって私たちは、全面核戦争のみが観察者にも社会にも明白に機能不全と認識されているが、他の種類の戦争は、さまざまな社会によっていぜんとして機能可能とみなされている世界に生きているのである」とホフマンは指摘している(SF, 265)。さらに戦争は、常時抑止体制を組むことや、革命戦争が古典的戦争に代替することによって、「国内化」されてきている。そして結局、社会的に機能すると考えられる限定戦争も、あるいは現代史によって国内化された戦争も、双方とも、つねに核戦争に、すなわち「戦争の意味の破壊以外の機能を持たない種類の戦争」に転化可能なのである(SF, 265)。
- 18) 人間の自由、とりわけ国家指導者の行動の自由については、拙稿「響きと怒り」209-215頁を参照。国家の政治指導者にとって国際システムとは、所与であると同時に挑戦でもあり、さらには理解できない未知のものでもある。そのような場において政策を立案することは、政治指導者にとっては、外部の国際システムを考慮に入れるだけではなく、国家内部の政治的・社会的権力関係や政治文化にも目配りすることを意味し、さらにその政策決定の目的は、上記諸要因間に均衡をみいだすことではなく、設定された国家目標を達成することにあるのだから、まさにその努力は、一種の錬金術的なものとなろう。それは開設済みの銀行口座を維持するというよりは、暗闇のなかで銃を撃つ行為に等しい。国際政治というゲームが本質的に持つ不確定性という性格ゆえに、個々の国家指導者がもっともしばしば直面する問題は、彼らの行動を制約する類のさまざまな障害というよりは、むしろ国際政治の気まぐれで競合的な特質に由来する不確定性が彼らが行った選択の結果に対する政治家のコントロール能力を奪ってしまうことなのであるとホフマンは指摘し、「政治家に複数の選択肢を残してくれる不確定性こそが、政治家が行った選択を不首尾に終わらせる張本人なのかもしれない」と述べている

(SF, 270)。くわえてよく知られた「戦争のパラドクス」がある。すなわち戦争を構成する個々の戦闘には、つねに偶発性の要素がつきまとう。万難を排して戦闘に臨んでも、勝敗は時の運かもしれない、劣勢を予想された側が戦場での勝利を得ることもある。それゆえ国力で優位に立つ側がつねにより大きな行動の自由をもつ保証はない。つまりある国との紛争に一気にけりをつけ、自国の思惑で事を進めていくために、彼我の力関係を見極めたうえで、戦争を選択したとしても、上記のように戦闘の帰趨が不確かで偶発性をはらむがゆえに、その選択した戦争それ自体によって、その当該国家が直面する不確かな状態は、むしろ平時よりも戦時のほうがずっと大きくなってしまいかもしれないのである。それは、財産と名声を一刻も早く手にしたいと望む男が、着実だが緩慢で浮き沈みを伴わざるをえない人生を誠実に歩むことに倦み、一攫千金を夢見て賭にでる姿とどこか似たところがあるといえよう。

- 19) 個人の視点から眺めた場合、歴史は、数知れぬ理由によって殺し、殺されたのち葬られる人間の墓場の如くみえるだろう。振り返ってみて、そこに意味をみいだすことは難しく、詩人とともに、その不条理さを嘆くことは容易であろう。人の命を犠牲にしてまで果たすべき大義、青雲の志を押しつぶしてまでかなえるべき理想、そのようなものの存在は疑わしく、総論として、平和主義者の教説に共感を寄せ、プレヒト流のシニシズムに同意することは簡単だろう。人間の環境に対する漸進的支配と人間の自由の展開のなかに歴史の真の意味の開示をみる進歩の哲学者でさえ、歴史の真の意味がその歴史を作る諸個人には容易く示されないことは認めざるをえない。人の短い一生と自由の進歩という報酬とのあいだには明瞭な不均衡があり、歴史は、曲がり角と回り道に満ちた苦難の道程である。したがって「不確かな明日のために今を生きる人間を犠牲にしてはならない」というカミュの箴言は一定の説得力をもつ (SF, 261)。たとえ歴史の冒険の結末が、すべての人間にとっての自由と平和であったとしても、その冒険は長く血塗られた道を歩み、結果として、人類が最後に手にする自由と平和は、墓場で眠る死者たちにとっては、遅すぎた慰めに似たものとなるであろう。このように社会学者が、一人の人文主義者として戦争の記録の意味を陰惨で陰鬱なものとして理解するとき、他方では、その行為と死が戦争の記録を形作る歴史上の諸個人は、彼らの行動を無意味なものとみなしてはいない。歴史上の出来事を一連の連鎖として後から回顧的に眺めると、登場人物たちの行動は愚かで馬鹿げたものにみえることが多いのだが、彼ら自身は、自らを運命の操り人形だとか、血に飢えた宿命の人質だとは考えていない。「平和主義者（とプレヒト主義者）は、外側に立っているから〈明晰〉なのである。しかし外部の者にとって無意味にみえるものに人びとが与えている意味を、まさに外部の者は理解することができない。それは、同胞に対する連帯の主張であり、自ら

が所属する共同体の擁護の言明であり、犠牲なしにはそのような連帯と団結はありえないという、行為を支える信念なのである」とホフマンは指摘する(SF, 261)。この点からみると、戦争とは、平時に社会や国家によって押さえこまれている野蛮な衝動の突発的な発露というだけではなく、それは、自らが属する社会と国家への人びとの心理的一体化の結果でもある。ホフマンは、次のように述べている。「(外側に立つ) 心理学者によって退行とか抑圧とかいって非難されることが市民にとっては、社会に負っている道義的・心理的利益のために、あるいは彼がそこにおいてのみ自身が自身でいられると感じる共同体の存続のために、支払わなければならない代価として経験されるのである。国家は、人を死に誘いこむハーメルンの笛吹き男かもしれないが、しかし笛吹き男たちが成功するのは、まさに愛情と忠誠の絆が笛吹き男たちと彼らに従う者たちのあいだに存在するからなのである。それゆえ、外側に立ち、非難する者は誰でも、多義的な立場に立たされだろう。すなわち彼は、たとえば生命の尊重といった絶対的な道義基準を彼自身が属する集団の上に置くことになるからである。あと知恵に助けられて、私たちはつねにアンティゴーネを賞賛しがちである。つまり彼女の純粹さのみが移ろいゆく共同体や党派のためになされる犯罪を贖いようように思われるのである。しかし私たちは注意しなければならない。というのは、もし彼女を褒め称えすぎるならば、私たちは、クレオンだけでなく、クレオンの大義は支持に値すると考えている人びとをもまた非難することになるからである。ある種の道義的な盲目さは、人びとを戦争に導く類の連帯と団結を主張する。しかし平和や生命のために連帯と団結を拒絶することもまた、ある種の道義的傲慢さなのである。」(SF, 262)。

- 20) 上記註12で引用したアロン『諸国民間の平和と戦争』の結語を「響きと怒り」の以下の結びと比較してみると、程度の差こそあれ、両者が示すメッセージは基本的に同じ方向を指し示すものであり、ホフマンに対するアロンの影響力の大きさをあらためて実感することができる。